

校長室だより
NO. 12
令和元年6月13日

すべては光る

梅園小学校長
たか すりょうへい
高 須 亮 平

魅力ある絵本との出会い ～「あじさい読書月間」に

今年度も、梅っ子ブックのありんこ活動（委員会活動）による「あじさい読書月間」が始まりました。期間は、6月4日（火）から28日（金）までで、読書を通して心を豊かにすることをねらいとしています。読書目標として、1・2年生は40冊以上、3～6年生は500ページ以上と設定されています。そして、あじさい読書カードに本の題名、一言感想、読んだページ数を記入していきます。子どもたちには、小学生の内にたくさんのよい本と出会ってほしいものです。

さて、毎年、「あじさい読書月間」にかかわって、小学生にとっての読書のあるべき姿を考えてきました。今回は、低学年から高学年まで読むことができ、学ぶことができる絵本について触れることにします。

そのような魅力的な絵本の中で、最近、絵本作家であるヨシタケシンスケさんの作品には惹きつけられるものを感じます。その作品は、タイトルで不意を突かれ、中身でうならされるような絵本ばかりです。まさに奇才と言うような作者と思われる。デビュー作が6年前ですので、もう既にご存じの方も多くいると思います。ここでは、初めの頃のもので、私が興味を持った3作品を紹介します。

まず、デビュー作である『りんごかもしれない』（プロンズ新社）です。話は、男の子が学校から帰ってくると、テーブルの上にりんごがありました。一見するとりんごのようですが、「もしかしたらこれはりんごじゃないのかもしれない」から始まり、「もしかしたら大きなサクランボの一部かもしれない」「中はメカがぎっしりかもしれない」などと、りんごがりんごであることを疑う男の子の想像は、とどまるどころを知らずにどんどん大きくなっていきます。何の変哲もない1個のりんごを前にして、小さな疑問から、常識も予想もぶち壊しながら、まか不思議なアイデアと想像力の壮大な世界が展開されていきます。そして、男の子が思い切っ

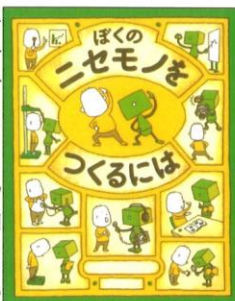


「りんごかもしれない」

って、一口「ガブ」っとかじってみると……。というように、発想の豊かさに目が離せない話になっています。そのような「考えること」を果てしなく楽しめる絵本です。

2作目の『ぼくのニセモノをつくるには』（プロンズ新社）は、「自分とは何者なのか」を問いかけてくる哲学的とも言える絵本です。怠け者の男の子は、宿題、お手伝い、部屋の掃除など、やりたくないことがいっぱいでした。そこで、あることを思いつきます。「ぼくのニセモノを作って、そいつに全部やらせてもらおう」と。それで、ロボットをお小遣いで買いました。ところがロボットは、「ニセモノだとバレないようにあなたのことを詳しく教えてほしい」としつこく質問してきます。男の子は、自分のロボットに名前や家族構成、外見などを教えていきます。「仕方なく考えてみたけれど、自分のことを話すのって、難しくて面倒くさい」と思う男の子。その中で、

自分の好きなものと嫌いなもの、できることとできないことなど、いろいろなことを確認していきます。次に、ロボットは「みんなから見た自分はどんな感じか」と質問してきます。男の子は自分を「人気者」と思っていたのですが、母親は「マイペースで言うことをきかない長男」、先生は「算数が苦手でお調子者」などと、自分が知らない一面を教えてもらい、自分にはいろいろな居場所があることに気付いていきます。また、自分にしか知らないこともあり、自分は一人しかいないことを知っていきます。そして、自分のことを考えるって面倒くさいけれど、何かちょっと楽しくなっていくのです。物語が進むにつれて明らか



「ぼくのニセモノをつくるには」

になっていく男の子の個性が、とても愛おしく感じられます。特に、どれだけ偉大な人間になるかよりも、どれだけ自分のことを気に入っているかが大事ということにも気付いていきます。そんな「自分らしさ」という哲学を、とぼけたテイストで優しく考えさせてくれます。小学生から高校生、もちろんもっと大人まで、幅広くいろいろな年齢の人が読め、考えさせられることの多い作品です。

3作目は、『りゆうがあります』（プロンズ新社）です。それほど哲学的といったものではありませんが、主人公は鼻をほじる癖を持つ男の子です。母親はそれをお行儀が悪いことから、見つける度に注意をします。注意されて面白くない男の子は、「鼻をほじる理由があればいいんだ」と考えます。そして、ある日、その理由を母親に言います。「ぼくの鼻の奥にはスイッチが付いていて、それを押すと頭からウキウキビームが出るんだ。このビームは、みんなを楽しい気持ちにすることができるんだよ」と。すると、「お母さんは、もう十分楽しいから、ウキウキビームはこれ以上出さないでくれる？」とお母さんは言



「りゆうがあります」

い返します。男の子が繰り返すムチャクチャな屁理屈に、お母さんは怒らずやや冷めた反応で切り返しています。次に、お母さんが「あ！今度はツメかんでる！！」と男の子に注意すると、男の子は「ちがうよ！これはね、ツメをくわえて、大人には聞こえない音を出しているんだ。この音はゴミ捨て場のカラスを追い払うことができるんだよ」と返答します。すると、お母さんは「へー。この時間はもうカラスいないから、音を出さなくていいから」というような楽しいやりとりがいくつも続いていきます。その理由の中には想像上の生き物が登場したり、絶対にありえないような妄想をしたりするまでに発展していきます。だめなことを正当化するための屁理屈を子どもなりに考え、理由をつけて怒られないようにするという、なんとも憎らしい中に愛らしい男の子の思考が描かれています。最後には、男の子がお母さんの癖を指摘しますが、今度はお母さんの答える屁理屈の内容に面白さがあります。この絵本を読むと頭ごなしに叱るのではなく、なぜそれをしたのか、どう考えているのか、まずは話を聞いてみようというようになります。子どもたちがついやってしまう癖。それには、子どもなりの理由が考えられるものなのですね。とても子どもらしい発想の楽しくて、しかもユーモアあふれる絵本となっています。